

『新・知内町史』編集方針

編集長 根本 直樹

本町史の編纂は、平成20年に町から依頼を受けたことから始まりました。それは「(昭和61年発刊の)前町史で取り上げきれなかった部分やそれ以降の出来事をまとめて、町の歴史をつなげてほしい」というものでした。

新しい町史の目指す方向性として、まず、「基礎的な資料となること・利用しやすいこと・まちづくりに寄与すること」というポイントを挙げました。その後協議を経て、前町史を含む知内の歴史の概要、平成を中心とした現代の知内の概要、そして知内の歴史を写真と年表であらわしたものの3巻で1つの町史とする構成としました。

第Ⅰ分冊のタイトルは『「知内らしさ」の現在』としました。「現在」としたのは、ここにいる時間と場所から今一度ふりかえる気持ちを大切にしたいからです。児童・生徒らが郷土の学習に利用できるように、簡易な内容であることを心がけました。知内町の自然環境からはじまり、先史時代から昭和時代までの通史的な説明と、民俗的な特徴も少し含まれています。また、資料集としてこれまでの郷土誌等に掲載されたことのない文献をあげておきました。

第Ⅱ分冊は、『「生活者の自治」をめざして』です。地域の生活の歴史とまちづくりを連動させた巻です。昭和から平成に変わった時期の出来事が、これからのまちづくりを考えるうえでの参考になってほしいという気持ちが込められています。懐古ではなく、これからの知内町の希望を見いだす作業をこころがけたつもりです。自治体史として、町民主体に地域を表現できないかということを意識しました。現代に生きる町民の様子と課題とを記録化する作業だったと思っています。

第Ⅲ分冊は『「懐かしい地元」の追想』です。外からふるさとを懐かしむのではなく、地元人としてしっかり見届けることを意図しています。写真と年表は町民の声がもっとも多かった要望ですので、一つの分冊としてまとめました。

総題『新・知内町史』の「新」の意味合いは、現在との向き合い方を重視するという町史としての新しい意図によるものです。過去の説明に終始するのではなく、先人達からつながる知内町民の「現在」を意識した、地域史としての構成と記述をこころがけたつもりです。知内町のこれからのに向けて、何らかの役割を担えることを願っています。